

## Ratnāvalīṭikā における信について

櫻井智浩

龍樹の『ラトナーヴァリー (*Ratnāvalī*, 以下 *RĀ*)』に対するアジタミトラによる注釈書『ラトナーヴァリーティーカー (*Ratnāvalīṭikā*, *Rinchen phreng ba* 以下 *RĀṬ*)』での、信に纏わる解釈を検討する。*RĀ* において信 (*śraddhā*; *dad*) の語は第一章第四偈、第五偈に確認されるが、信を *RĀ* の教えの根幹としつつも、智慧との関係を言及するのみでそのものを定義してはいない。*RĀṬ* では、この信について第四偈の注釈において定義される。

「信」は、業果と〔四聖〕諦と〔三〕宝に対して、優れた確信 (*abhisampratyaya*; *mngon par yid ches pa*) の相を持つ明浄なる心 (*prasādacetas*; *sems rab tu dang pa*) である<sup>1)</sup>。

この定義は、『俱舍論』<sup>2)</sup>、『唯識三十頌』安慧釈<sup>3)</sup>等に見られる、善の心所の一つとしての定義の内容に準じている<sup>4)</sup>。*abhisampratyaya* の語義は「確信」「満足」等である。既に指摘されているように<sup>5)</sup>「業果と〔四聖〕諦と〔三〕宝」という法に対する「確信」であり、佛の人格面に対してではない点は注意されるべきであろう。一方、*prasāda* の語義は「静まった」「清らかな」等であり、信の定義では対象に対して心が確立している、という意味である。両者共、原始經典類に起源を持ち、又信を心の明浄と同義とすることも、パーリ、有部、唯識の三系統に共通であると指摘されている<sup>6)</sup>。併し、この他に願樂 (*abhiḷāṣa*) を含む場合<sup>7)</sup>があり、又どの定義が第一義的なものかは論書によって異なる<sup>8)</sup>。その中で、*RĀṬ* の所説は、世親造漢訳『大乘五蘊論』<sup>9)</sup>と最も符合し、世親の唯識論書とほぼ同様の通仏教的理解の上で、*RĀ* における信を定義している<sup>10)</sup>。一方、帰敬偈である第一章第一偈の注釈では、礼拝という問題に関連し、独自に隨信行者 (*śraddhānusārin*; *dad pas rjes su 'brang ba*)、隨法行者 (*dharmānusārin*; *chos kyi rjes su 'brang ba*) という面から注釈を与える。両者は、解脱に至る迄を信定慧の三種により分類した七聖者に含まれ<sup>11)</sup>、信と関連した問題と言える。先ず、隨信行者について説示される。

隨信行者達は、功德を説くことに先行する礼拝をなして後、「これこそが善逝によって、造られたのである。」と正に信のみによって、これを聞をはじめとして〔思、修〕に入る

のである。(Pek. nge153a2)

このように、随信行者は信のみによって聞に入ると定義される。この場合の信の内容は、上述の「業と果と〔四聖〕諦と〔三〕宝に対して、優れた確信の行相を持つ。」という定義に追従するものと言える。次に随法行者について詳説される。

随法行者は説示を認める者達であるが彼らは礼拝が〔優れた〕特徴を有することを対象として、これを思い浮かべるのである、即ち、他〔の外道〕にこの特質は存在しないから、これこそが世間全ての灯火〔である仏〕に礼拝することであると考える。その様に理解した者達に非常に歓喜が生じ、而もその様な言葉に対して、賢者はこれを思い浮かべる。即ち、もし信を備えて、更に三〔宝〕に帰依することを怠ることを恐れるから、外〔道〕に礼拝する苦勞 (ngal ba) をしないならば、聖龍樹は真実を御覧になることが堅固不同な信を得た事を言う何の必要があるのか。このように、これは外教徒の学説によって假説された法が相互に矛盾することを説明しておらず、即ち以上のように、直後に「ひたすら善い法を説きましょう<sup>10)</sup>。」と述べるであろう。そのようであるから、まさにこれこそが疑いなく有情の最上の利益を得ることに随順すると考える。それから、こ〔の論〕を聞くこと等〔思、修〕に入ることになろう。観察に先行して、布施を説くと認めない彼らも又、礼拝に於いて功德を説くことを聞いて、素晴らしいとすることに目覚めるから、伺察 (dpyod) と聞を為すのである。(Pek. nge153a2 ~ 153a7)

ここでは、仏説の優位性を認めつつも鵜呑みにせず、吟味を通じ法を理解していく彼ら本来の在り方が看取される。「観察に先行して、布施を説くと認めない」ことから、信より法を自ら吟味し、理解するという智慧との関わりが優先されることが窺えるが、*RĀ*の教えは「有情の最上の利益を得ることに随順すると考え」「礼拝において功德を説くことを聞いて」「目覚める」というように、*RĀ*の教えによって、礼拝の功德が法の吟味の契機となることが示されている。それ故、随信行者は信のみ、随法行者は法の吟味を経た上で、聞に入るという違いはあるが、随信行者にとっては礼拝がそのまま信の表明に、随法行者にとっては礼拝の功德を以て伺察と聞の契機となると指摘し、両者共に、まず礼拝することの重要性を示していると言える。その上で、礼拝した後の両者の法の受容の相違性が示される。

鈍根 (mr̥du indriya; dbang po rtul po) にして劣慧 (blo zhan pa) である言葉の問題にする者 (tshig lhur len pa) 達である彼らが、全ての過失から出離することが、正に過失より出離することのみであると理解されるが、間接的に発せられた意味ではないから、彼らは明らかに知るであろうからである。また、利根 (tikṣṇā indriya; dbang po rmon po) にして、文頭を言っただけで理解する彼らに対しても又、同様に説くことになるであろう。即ち、ある時有のみについて (説示を) 為すとき、全ての過失を離れて、全ての功德による莊嚴

ではないことも又あるのであって、例えば水晶と青玉と緑玉石等が〔原石のまま〕の如くである。それ故に二つの特徴を説くのである。(Pek. nge153b6～153b8)

この内、随信行者は鈍根にして、劣慧、言葉を問題にする者、随法行者は利根にして、文頭を言っただけで理解する者である。「二つの特徴」とは「過失を離れる」「功德を莊嚴する」ということを指していると考えられる。前者は随信行者、後者は随法行者の理解のあり方を示し、慧という点から、随信行者を随法行者より劣った資質のものとして見ていることは明白である。随信行者と随法行者を、鈍根、利根という資質の問題として分けることは『俱舍論』と軌を一にするもの<sup>13)</sup>だが、随信行者について、劣慧、言葉を問題にすること、随法行者について、文頭を言っただけで理解することは、『俱舍論』にはない表現である。RĀTでは、利根、鈍根の内容を、前者は言葉に捕らわれ内容を真に了解できないが、後者は多言を弄さずとも法の真意を了解するという、仏説等の語句の了解という点から説示していると考えられる。

- 
- 1) Pek. nge156bl. 北畠利親『龍樹の政治書簡』1988 p5 註3に既出。
  - 2) Pradhan (1967) p55, 16～7
  - 3) Levi (1925) p26, 124
  - 4) cf. 勝呂信静「初期大乘經典にあらわれた信」仏教思想研究会編『仏教思想11 信』1992 p146
  - 5) 勝呂同 p146
  - 6) cf. 藤田宏達「原始仏教における信の形態」『北海道大学文学部紀要』1957 p83
  - 7) cf. 注3)
  - 8) 前田(真野)龍海「心所に於ける信」『大正大学年報37』1950 p103～105によると、信を三種に説くことは、ハリバドラ (Haribhadra) による『現観莊嚴論』にも確認されるが、根本的な定義は「信とは有るといふことよって、(そのものに対して) 忍可することなり。」とされ、優れた確信を第一義とすべきとする。
  - 9) 大正蔵第31巻 p848c, 121
  - 10) アサンガに帰せられる『(大乘) 阿毘達磨修論』でも信を問題の二要素と願楽と定義し(藤田同 p82)、その所説はハリバドラのものと一致する。cf. 藤田同, 前田同 p103
  - 11) cf. 兵藤一夫「説一切有部の修行体系における信—随信行, 信勝解を手掛かりにして—」『仏教学セミナー』1986 p31
  - 12) RĀ 1-1b
  - 13) 兵藤同 p41

〈キーワード〉 龍樹, アジタミトラ, 信, 随信行者, 随法行者

(大谷大学大学院)